神のおしおきゲーム

澪香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神のおしおきゲーム

【Ｎコード】
Ｎ９５５８Ｚ

【作者名】
澪香

【あらすじ】
お父さんの仕事の事情でＯ県に引っ越してきた少女　山田琴音と天使　ミカエルがえがく　ファンタジー物語です

第一話　天使　現れる！！！！

「ねぇ神様っていると思う？？」

「えぇいるはずないじゃん！！」

そんな空想の世界の人物なんかいるはずない・・・そう思っていた

「たしかにでもいたら楽しそうじゃない琴音？」

そう言って篠岡萌（しのおかもえ）は私に質問してきた

「いたら楽しいかもね」

もちろん嘘だ・・・いてもいなくても人生なくも変わらないだろう

あと私の名前は山田琴音（やまだことね）だ

「そうだねぇ楽しそう」

キンコーンカンコーン

そう言っていつもとあんまり変わらないファンタジックな話は終わった

帰り道

たしかに神様がいても別にいいと思うがいたとして地球上の大人数の人間の願いをどうやってきくのだろうか・・・

家

「ただいまー」

ソファにすわり机の上のチラシをよける・・・

「な・・・なにこれ！！！！」

私は突然、声をあげた

この家が売られているのだ

「お母さん・・・これ！！！」

「あぁ引っ越すから売ったのよ・・・あっ言ってなかったっけ。荷物まとれといてねー」

「ねぇどうして引っ越すの？？？？」

「お父さんの仕事の事情よー」

う・・・嘘でしょ・・・何かのまちがい・・・そう思った

「ただいま」

お父さんが帰ってきた

「お父さん！どうして引っ越すの？」

「会社が倒産したんだ・・・だから前に住んでたO県に引っ越すんだよ」

「と・・・倒産」

次の日

今日は金曜日・・・引っ越すのは土曜日と言っていたので今日は皆にお別れを言わなくちゃいけない

キンコーンカンコーン

結局、お別れができないまま引っ越すことになった

O県

ここが新しい家・・・前にお父さんが住んでたから、ちょっと汚い・・・

月曜日

今日は新しい学校へ

「転校してきた山田琴音です。よろしくお願いします」

休み時間になると3人の女子が話しかけてきてくれた

「ねぇ何処から引っ越してきたの？」

「どうして引っ越してきたの？」

「今度、遊ばない？いろいろ案内してあげる」

そんなことを言われ、放課後には友達といえるぐらいまで仲良くなった

次の日

私は1人で学校へ机にはシネなどひどい言葉ばかり

「な・・・誰がこんな事を・・・」

「私がやったの・・・いきなり転校してきて、それだけでもウザいのにすぐ皆になじんで、ウザいんだよねそういうの！！」

後ろから声がした振り向くとクラスの中心人物の杉本里奈（すぎもとりな）だった

「なんでこんな事するの？こんなのイジメだよ！！！」

「えっ？何て言ったの？聞こえなーーーいフフ私のお父さんはここの校長よ変に言うとどうなるかわかってるの」

なんて女だ・・・私はそう思った

休み時間

里奈のせいなのか話してくる人は誰もいなかった

家

こんなときに神様がいたら・・・そう思った

ピロリーン　メールの音だ

なんだろう・・・

宛て先　　神

件名　契約

本文　神と契約し悪人をおしおきしたいのなら
下の部にサインしてください
―――――――

神と契約??ホントだったら凄いことだ

私は遊び半分でＰＣで使ってるサインを書き送信した

そのときだった周りが白く光、気がつくと雲の上!?にいた

「あわぁぁ」

「どうしたのですか?」

そこには1人の少女

「お・・・おちるだろ・・・あれ・・・なんでおりない・・・」

「ここは時空の歪みでちょっと変なんですよ」

・・・意味不明だ説明が変なのかそれともココが変なのか分からない

「あなたは神と契約しました。契約条件として悪にならない事、善を突き通す事、天使である私と行動をともにすることですが、よろしいですか？」

・・・さっぱり意味がわからんぞ

「ていうことは、お前は天使か？」

「はい！！！ミカエルともうします」

なんてこった神が本当にいるとは・・・

「分かった・・・契約する」

「はい！！分かりました」

そういうとミカエルはペコリとお辞儀をし、どこかへ走っていった

気がつくと自分の部屋にいた

第二話　木下みかん？現る

気がつくと自分の部屋にいた

次の日

里奈ははたして悪人に入るのだろうか・・・

キンコーンカンコーン

今日もいちだんと机に落書きが・・・先生は気づいてるのだが気づかないふりをしている

「きょ・・・今日は転校生がきています」

ドアが開きそこから出てきた人はどっからどうみてもミカエルだった。

あいつはいじめの対象になりやすそうだ

「えっと・・・その・・・木下ミカンです」

男子にはだいぶ評判があり、里奈は手を出しづらいらしい

みかん《ミカエル》とはなぜか隣の席だった

「あっ・・・琴音さん契約条件のためにここに転校してきました」

ペコリとみかんはお辞儀をし席に座った

「ウザッ」

ぼそりと聞こえた里奈の声・・・みかん・・・ドンマイ

休み時間

「あのぉ・・・もしかしてあそこにいるかたが悪人の対象ですか？？」

「あっあぁ私からしたらだけどな・・・」

「たしかに気の強そうな感じでよく死ねとかウザイとか言ってますよねぇ」

ていうかどうしてこんなことしてるんだ??

「じゃあさっそく神のおしおきを始めますか？」

「待て待て待て待て待て待て待て説明しろ・・・」

「あっしてませんでしたっけ・・・」

「昨日ちょっとあっただけと今はなしてだけだろ・・・」

「あぁ忘れてましたアハハー・・・はっきりいってやってみないとわかんないですよ？」

みかんは笑顔で笑っていった・・・

「じゃあさっそくやりますね・・・神ロード・・・オープン」

みか・・・嫌・・・ミカエルはそういい手と手でパンと音を鳴らす

「あっあれはなんなんだ!??」

私は指を指す・・・そこには黒い物体があった

「あれは悪のかたまりです。あれを消し善だけの世界にする、それが私達、天界の住人の計画です」

第三話　神のゲームの始まり！！

「あれは悪のかたまりです。あれを消し善だけの世界にする、それが私達、天界の住人の計画です」

計画・・・ねぇ

「じゃあいきますよぉ・・・女神流第１機・神術の刀！！」

あぁこれは非現実的な…

「琴音さん！これで悪のかたまりを斬ってください！！」

「斬るって・・・あれを！！」

「はい！！」

無茶を言うなこの天使は！！

「私に悪を斬れと・・・」

「あのぉ斬らないと里奈さんの善悪の悪が消えません！！最低限に斬らないと、いじめも終わりません！！」

なるほど・・・って死ぬ可能性もあるんじゃないかぁ？？

「えっともしかして命がけ？？」

「あたりまえじゃないですか！！」

ミカエルは予想以上の笑顔で言った・・・ちょっと不気味に見えた

しかたない・・・言い訳してても終わらないだろう・・・

私は、悪のかたまりに向かって走る・・・

「おりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ぐにゃ

突き刺した感触が気持悪い・・・

「おぉさすがです！！」

さすが・・・って私は特に剣道とか習ってないし普通の人間だぞぉ

「あっ琴音さん！後ろ！！」

私は後ろを向くと悪のかたまりがもう目の前にいた

「キャァァァーーーー」

私が悲鳴をあげる

「女神流第3機・神の盾！」

目を開けてみてみるとなぜか生きている・・・周りには何か迷路のような不思議な模様の丸い物体の中に入っていた

「だ・・・大丈夫ですかぁ??」

ミカエルだった

「あぁ大丈夫だ・・・ってお前も戦えたのか!!」

第四話　里奈の真実

「あぁ大丈夫だ・・・ってお前も戦えたのか！！」

「はい！！こう見えても天使ですから！！」

自慢げにミカエルが言う

「それより早くしないと、悪のかたまりが増えちゃいます」

私を囲んでいた物はパズルが崩れていくように消えてった

「おりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

私は刀で悪のかたまりを斬っていく

「あれ！！あれです！！あれを斬れば終わりです」

「よっしゃーおりゃぁぁぁぁぁ」

なんだ今までとは何かちがう

「それは本人が抱えている悩みのかたまりです！！」

悩み・・・里奈にもあるのか・・・

グチャァァァ

なんかマジでやばい音だ人殺しみたい

ベショ

まだまだ

グシャ　グショ

悩みのかたまりは綺麗に光きえていった

「終わりです。お疲れ様でした」

ミカエルがそういうと、いつの間にか教室に戻っていた

「な・・・あれ??」

私がそういうとミカエルは

「どうしたんですか??」

と疑問な言葉を言ってくる

「どうしたじゃない、なんも変わってないじゃん」

「変わりましたよっ!!」

ミカエルは自信満々に言った

「どこが・・・どこが変わったんだよ!!!」

「変わりましたよ!!話しかけて見て下さい」

「えっ、じゃあ、里奈・・・さん??」

「ん?あぁ転校生!の琴音??・・・だっけ?このまえはゴメーン魔がさしただけ!!今は楽だなー」

あれ?前とだいぶっていうかかなりちがう!!

「そうなんだ!!」

「あのさ!!今度あそばない私の家さぁ結構大きいんだ!!」

「うん!!」

放課後

「琴音??琴音って北方面??あっ一緒だ!!一緒に帰んない??」

「うん!いいよ」

帰り道

「私ね、実際、友達いなかったの・・・だから、私はお父さんがエライからって事を使って友達っぽく見せてたの・・・本当の友達じゃなくて偽友達だった」

里奈はいろいろ事情を話してくれた。

さらに友達になった!し、里奈の家がマジで豪邸でスゴいと思った

第五話　里奈の家！！

帰り道

「私ね、実際、友達いなかったの・・・だから、私はお父さんがエライからって事を使って友達っぽく見せてたの・・・本当の友達じゃなくて偽友達だった」

里奈はいろいろ事情を話してくれた。

さらに友達になった！し、里奈の家がマジで豪邸でスゴいと思った

「じゃあ、あとでぇー」

遊ぶのは今日！！豪邸だからちょっと緊張してるんだけど、友達の家だしふつうでもいいよね

家

「おかし、おかし・・・あ！これにしよ！！」

遊ぶときはおかしを持っていく！私の「あたりまえ」ってやつだ！！

私はそれから、すぐに家を出て里奈の家に向かった

ピンポーン

「えっと山田琴音・・・えっと里奈さんの友達ですけど・・・」

「あぁーお友達！！めずらしい！！さっはいって入って！！」

里奈のお母さんは強引に私を家に入れた

「あの、里奈は？？」

「あぁーあの子は二階の部屋だったわ！！里奈ーー友達ーーー」

里奈のお母さんは大きな声で里奈を呼ぶ

「あぁーわかった・・・今いそがしいからつれてきてーーー」

里奈のお母さんはため息をつきながらも私を誘導させる

「しょうがない子だなぁー誰に似たのかしら！！」

ボソボソと里奈のお母さんは言っている

「ここが里奈の部屋！ノックしないと怒られるから気をつけて！」

里奈のお母さんはそう言い残すと一階に下りていった

トントン

私は里奈の部屋のドアを二回叩く

「誰？？」

里奈の声だ！！

「琴音だよ！！」

私は質問に答えた

「うん！！入っていいよ！！」

里奈は元気だ、私はたまについていけなくなる

ガチャ

私が入ると里奈は不思議な機械に入っている

「何それ？？」

私は不思議な機械を指差しながら言った

「これはね、えっとなんだっけ・・・まぁ入ると落ち着くの心の底から」

里奈は笑って言う・・・ちょっと不気味に見えた

ピンポーン

あっみかんかな？？みかんも遊ぶ人の1人だった

「あっそうだ！！お菓子もってきたの」

私はそう言ってじゃ〇りこを出す

「そういうのいらないよ！！私の家で出すから！！！」

たしかに里奈の家は豪邸でスゴくお金持ちだけど・・・

私はじゃ〇りこをしまう

ガチャ

みかんが里奈の部屋に来た

「ちょっと！！あんた私の部屋はノックして入んなさい！！わかった？？」

いきなり怒り出す里奈にみかんはビックリしている

「ゴメンなさい！！でも、なんでノックするの？？」

みかんは謝りながらも質問する

「そんなの決まってるじゃない！いきなり入ってきてビックリしない人がドコにいるのよ！！」

たしかにそうだけど…

「ふーんそうなんだ！」

みかんは納得している

「里奈の使ってるマシーンは悪が取り付いている」

みかんは里奈が気づかないように私のほうに来て里奈に聞こえない声で言った

その言葉にビックリしながらも表情には出さないようにした

「ふぁー落ち着いた！！」

もしかしたら機械から悪が乗り移ったらどうしよう・・・

「どうしたの？琴音？？変な顔して！！」

里奈が私の顔を見て心配そうな目で見る

またも、みかんがコッチに来て言った

「里奈にも悪がついた！悪を斬んなきゃ！！」

第六話　二回目のおしおき！！

「里奈にも悪がついた！悪を斬んなきゃ！！」

背中がゾクッとした

「神ロード・・・オープン！！」

またも知らないところ・・・ここはドコなのだろうか・・・

「女神流第1機、神術の刀」

私の視界には人間の形をした不思議な物体から出てくる悪のかたまりとさっきの不思議な機械の形に似ている物体から出る悪のかたまり

「おりゃぁぁぁーーー」

私は悪のかたまりにむかって刀を向け走る

「誰も信じられない・・・信じてどうなるの・・・裏切られるだけじゃん！！」

人間の形をした物体からは里奈の声が聞こえる

「琴音さん！！この声は里奈さんの本音です！！・・・きっとこれはレベル3です」

「レベルってあんのかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」

私は大きな声で言いながらも物体を斬っていく

「里奈さんを説得しないとおわりません！！」

しょうがない！！

「里奈！！信じられないって信じようとしてないのは里奈のほうじゃないの」

「ちがうちがうちがう！私は前に裏切られた！！信じてた人に・・・」

「じゃあなんで裏切られた辛さを分かりながらも信じないの！！」

「そんなのできない・・・私には無理・・・こんな出来損ないの私になんか」

「なんで出来損ないっていうの？？わかんないよぉ」

「出来損ないだよ！勉強とかできるだけでコミューケーションもきちんとできないし・・・」

「そんなことない！！まだ未来があるじゃん！なんで未来があるのにそんなことをいうの？？」

「このまま生きるとまた信じた人に裏切られる・・・そんなんだったら未来なんかいらない！！私は、私は、そんなんだったら死んだほうがマジだぁぁぁぁぁあ」

里奈が叫ぶと悪のかたまりが固くなる

「そうだ！！もうイヤなら悪で満たしてあげよう！友達なんか信じる人なんかいらない！」

機械の形をした物体が言う

「だから唯一いきていられる方法を私はとった！それが悪いか！！」

「ダメだよ！悪に全部乗っ取られてもいいの？？」

「いいよ！どうせ私なんか生きていなくても生きてても世界は何も変わらない！！」

「そんな事ない！！じゃあ今日は誰の為に里奈の家で遊んだの？？里奈が遊びたいって言ったんでしょ！！」

「そんな事言って実際私のこと嫌ってるんでしょ！！本音言いなさいよ・・・もうかまわなくてもいいよ」

「そんな程度のつもりで友達になろうとなんか思ってない！！」

空間に次々に響く皆の声、私は里奈を救いたい！！

第七話　本当の友達！

「そんな程度のつもりで友達になろうとなんか思ってない！！」

空間に次々に響く皆の声、私は里奈を救いたい！！

友達だから！

「嘘だ！人間は誰もが嘘をつく！本当はウザいとか思ってる！」

「なんで私の事、信じてくれないの？信じないと本当の友達なんかできないよ！」

「そんな心が読めないし、私みたいな間違いだらけのコミューケーションじゃ無理に決まってるじゃん！」

「それでも！たとえ間違いだらけでも、私は里奈と友達・・・本当の友達だと思ってる！」

「本当の友達？」

「本当の友達！どんなことも協力し合って、どんなことも一緒だよ！」

「じゃあ、信じあうって事？私は、琴音と本当の友達？」

「そうだよ！だから、信じようよ！皆を自分を！」

「うん・・・」

その言葉を最後に里奈の心の物体は光となり、消えていった。

悪のかたまりも消えていく。

「里奈さん！スゴいですよぉ！」

みかんはそう言ってこちらに走ってくる。

「よかった。救えた」

急に周りが光る、目を開けると里奈の部屋にいた。

不思議な機械はどこにもなかった。

「里奈！今日は良いことあった？」

「なんか、前より・・・いや人生が楽しくなった、心が楽になった・・・でも、どうしてだろう？」

「本当の友達と一緒にいるからじゃない？」

「そうかもね！」

里奈と私とみかんは楽しく遊んだ。

豪邸と言っても普通の心を持ってるのは変わりない。

私が今日、学んだことだ！

第八話　遊び疲れた日のこと

豪邸と言っても普通の心を持ってるのは変わりない。

私が今日、学んだことだ！

いつか、何でも分かり合える家族のような本当の友達・・・うう
ん親友になれたらいいな！

私は帰り夕日を見ながら考えた。

次の日

「琴音ー、昨日はありがとう！私、友達とこんなに楽しく遊んだの
初めて！」

「うん！里奈！私もとっても楽しかった！」

もうきっと・・・ううん絶対、里奈に悪が出ることはないだろう・
・・

「琴音さん！昨日はお手柄ですよ！」

みかんは私に近づき笑顔で言った。

「そういえば、みかん！昨日なんで途中からいなかったの？」

「えっとあの、お母さんに呼び出されて・・・」

実際みかんは天界に報告すると言って途中からいなくなったのだ。

「ふーん・・・じゃあ今度は琴音の家で遊びたいな！」

「えぇー私の家、きたないよぉー」

「いいじゃん！遊ぼうよ！ねぇ！」

「しょうがないなぁー今日帰ったら片付けなきゃ！」

今日は笑顔が絶えなかった。

「ねぇ琴音！私、好きな人できたの！」

それは次の日のことだった、里奈が突然私に言ってきた。

第九話　里奈の好きな人！

「ねぇ琴音！私、好きな人できたの！」

それは次の日のことだった、里奈が突然私に言ってきた。

「誰？誰ぇー」

「えっとね！隣のクラスの綿川榊君！」

「えっ！あの超モテ男子の？」

「そう！あの優しい感じと・・・あのカッコイイ瞳！完璧でしょ！」

完璧ねぇ・・・

「ふーん・・・」

「で！琴音には好きな人いないのぉ？」

好きな人・・・ねぇ・・・私は・・・

「私は・・・」

「私は？」

「いない」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーッ」

「なんでそんなに驚くの？」

「琴音！今までの人生で恋愛したことは？」

「ないけど？」

「もういいです・・・」

だって、いないものはいないんだししかたないじゃん！

キンコーンアカンコーン

授業始まりの鐘が鳴る。

「今日は教育自習生が来ています」

第十話　みかんが倒れ、琴音は・・・

「今日は教育自習生が来ています」

ガラガラーッ

「キャーッイケメンじゃん！！」

女子が騒ぐどうやら、男性らしい。

「今日からこのクラスの教育自習をさせてもらう、福野望（ふくのぞむ）です。」

「琴音、なんか私・・・」

みかんが言う。

「どうしたの？」

「あのひ・・・」

バタンッ

みかんが急に倒れた。

「みかん？どうしたの！みかーんッ」

「ククッ」

誰が言ってるか分からないが何処からか笑い声が聞こえる。

みかんは保健室へ運ばれた。

「琴音ちゃん？ミカエ・・・みかんちゃんと仲が良いの？」

「えっ・・・まぁ・・・そうですけど、何か？」

福野先生が聞いてきたので普通に答えた。

「いや・・・なんでもない」

一瞬、福野先生の声が低く怖かった。

「そ・・・そうですか・・・」

でも、今思えば可笑しい・・・、みかんは普通の人間では、ない！・・・普通、倒れるか？

「琴音ちゃん、あとで裏校舎にいいかな？」

「えっ、いいですけど、どうして裏校舎なんですか？」

「うーん、秘密のことだからだね」

「秘密ですか・・・分かりました」

キンコーンカンコーン

昼休みになり、私は福野先生が言っていた、裏校舎へと急いだ。

「行っちゃダメ・・・」

何処からか声がした、みかんが倒れたときとちがう声・・・。

「誰・・・なの？」

「私は、ミカエル・・・アイツは敵だから・・・ダメ、ダメ」

「ミカエル・・・みかんなの？」

「そこで何を独り言を言ってるんだい？」

「福野せ・・・」

私はスタンガンで気絶した。

「ここは・・・私はさっきまで学校に・・・」

目が覚め、目の前には、・・・あの不気味な機械？

「・・・あれ？」

動かない・・・私は、横を見る。・・・鎖でしばられている。

「ククククッ！」

「福野先生？」

「あぁーそうだよ！実際はエキドナ！まぁ福野でもいいがな」

「エキドナ？」

「そう！私は・・・・天使に反乱する悪魔だ！」

「悪・・・魔？」

「そう・・・チッ時間がない・・・お前は今日から私の操り人形だ！」

操り人形？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9558z/

神のおしおきゲーム

2012年1月14日14時53分発行